

1998 タイ農村におけるオルターナティブな開発・発展に果たす仏教の役割

鈴木 規之(琉球大学 法文学部) 浦崎 雅代(琉球大学大学院 人文社会科学研究科)

| 1998 年タイセミナー | 自由報告 |
|--------------|---|
| 発表者 | 鈴木 規之(琉球大学 法文学部) 浦崎 雅代(琉球大学大学院 人文社会科学研究科) |
| 表題 | タイ農村におけるオルターナティブな開発・発展に果たす仏教の役割 -開発僧と在家者との関わりを中心として- |

1998 年 7 月 20 日

タイは、昨年のバーツ危機以来、深刻な経済状況に陥っている。1980 年代後半からの高度経済成長時を経て、ASEAN の優等生として NIES 入りも近いといわれていたタイであったが、その様相は一転して国民全体が先の見えない不安にさらされている。こうした状況の中、高度経済成長時から経済中心(開発主義的)の開発のあり方に疑問を持つようなオルターナティブな開発・発展を求める動きが出始め、不況下の現在では重要性が増しつつある。その 1 つとして仏教に根ざした開発・発展のあり方が模索され、開発僧とよばれる僧侶たちの活動が東北タイを中心に広まっていた。このような状況からタイ国内はもとより欧米や日本の研究者による開発僧についての研究は数多い。しかし、それらの研究は開発僧の理念や実践の研究に止まり、在家者すなわち村人との関わり(相互作用)という視点が欠如していた。

また、このような開発僧の活動に対しては、僧侶という権威を使っての上からの運動であり、オルターナティブな開発・発展を主張する論者の捉えるような草の根からの運動ではない、という「開発の言説」を指摘する批判や、開発僧の運動は農村共同体復古主義の現れであり、農村に村人を縛り付けておくことは、自由そして人権の尊重という時代の流れと逆行するのではないかという批判などがある。さらに、このような開発僧の活動がオルターナティブな開発・発展に結びついていくかについては限定的な役割しか果たせないという根本的な批判がある。

本研究ではこれまでに提示されたこれらの批判を前提として、開発僧が約 20 年間活動を行い、すでに具体的な成果を挙げているチャイヤプーム県ゲンクロー郡ターマファイワン村において、開発僧(ルワンポー・カムキエン師とその弟子たち)と在家者とのインターラクティブ(相互作用)な関係を重視するという視点で村人 187 人へ聞き取り調査を行い、開発僧の活動による在家者の意識の変容を中心に考察する。

聞き取り調査を基に、①村人と僧侶(寺院)との関わり ②開発僧の活動評価と開発の担い手について ③村への満足度と村人が望んでいる物や事柄についての3つの視点で分析した。

その結果、調査地においては約20年に及ぶカムキエン師の活動についての評価は高く、寺への参拝度などからみても、今でもカムキエン師の影響は大きいことが明らかとなった。特に開発の担い手については、僧侶から村人自身へという意識の変容が見られ、NGOやPOなどの活動も展開されてきている。在家者自身のこうした変容は、たとえ僧侶から蒔かれた開発の種であっても、在家者自身の自主性と僧侶との相互作用の帰結であるから、上からの開発言説であるとは言い難い。

また、これらの一連の活動は地域や国境を超えた市民社会的ネットワークを創り出す新たな共同体の構築を求めており、共同体復古主義との批判も不適切である。確かに、現状は萌芽的状況にあることは否めないが、ネットワークは徐々に拡大しており、開発主義を見直さざるを得ない今後において、オルタナティブな開発・発展を模索する動きは、よりグローバルなそしてより重要なものとなる可能性に満ちている。タイ農村における開発僧や在家者たちもその主体の一つである。